

## トリエステにおけるコンフリクト —クラウディオ・マグリスにおける中欧の成立をめぐって

津田雅之（文学研究科・比較文学）

### 1. はじめに

ハプスブルク帝国の文学に関する通史『ハプスブルク神話』や、ドナウ河流域をめぐる文化史的な小説などによって、ノーベル賞の候補となっている知識人作家クラウディオ・マグリスを輩出した北イタリアのフリウリ＝ヴェネツィア・ジュリア州の州都トリエステは、スロヴェニア、クロアチア、オーストリアとの国境に位置する港町である。トリエステと同じく、帰属する国を何度も変えたことによるコンフリクトを経験してきた、私の現在の研究テーマである文学史家クルティウスの故郷であるアルザス地方に、マグリスが、親近感を持っている<sup>3</sup>ことを知ったことが本研究の出発点である。

20 世紀文学を代表するプルースト、ジョイス、カフカの三人全員が、トリエステと何らかの関わりを持っている。『失われた時を求めて』のヒロインであるアルベルチーナは、トリエステを故郷とするオーストリア人であり（トリエステがオーストリア領であった時代は第一次大戦で“失われた”）、それゆえ、彼女には海のイメージがある。また、海洋文学の古典であるホメロス『オデュッセイア』の現代版『ユリシーズ』を書いたジョイスは、20 世紀初頭の約 10 年トリエステに住み、ハプスブルク帝国の文化である<sup>4</sup>、フロイト、ヴァイニング、マゾッホを受容する。『ユリシーズ』の多言語性（コンフリクト）は、ハプスブルク帝国の多言語性・多民族性によるものだろうか、それとも、港町の多言語性・多民族性によるものだろうか。一方、カフカが 1907 年 11 月から 1908 年 7 月にかけて勤務したゼネラル保険会社 *Assicurazioni Generali* のプラハ支店の本社はトリエステにあり、彼は、トリエステに転勤願いを出していた（却下されたが）。これは、プラハと比べ、トリエステがユダヤ人に寛容であった<sup>5</sup>からであろう。このゼネラル保険会社があるため、トリエステがハプスブルク帝国の経済の中心地とも言えたのである。

### 2. 調査概要

・期間：2010 年 2 月 20 日～3 月 13 日

・調査地：トリエステを中心としたフリウリ＝ヴェネツィア・ジュリア州の国境地帯、アドリア海の港町（イタリア）、イストラ半島（クロアチア）

### 3. マグリスと中欧

国民国家が解体しようとしている現代において、EU の多言語性のモデルともなりうるハプスブルク帝国の多民族性は再評価されつつあり、また、これまでの歴史学では軽視されていた港町文化の研究も進んでいる。こうした研究には高度な語学能力を必要とされるが、文学研究者は、歴史学研究者と比べ、自分の専門の言語だけに執着する傾向があり、研究上でもコンフリクトが

<sup>3</sup> Angelo Ara e Claudio Magris, *Trieste. Un'identità di frontiera*, Einaudi, 2007, p.66. Angelo Ara, *Fra nazione e impero. Trieste, gli Asburgo, la Mitteleuropa*(Garzanti,2009)のマグリスによる序文 (p.11)。

<sup>4</sup> 世紀転換期のウィーンでもよく上演され、ジョイスが好んだ、イブセンやワーグナー楽劇も、トリエステの文化人が、イタリアで最初に受容したのである。

<sup>5</sup> 河島英昭『イタリア・ユダヤ人の風景』（岩波書店、2004 年、233-298 頁）

生じる。中世の地中海に君臨していたヴェネツィア貴族の使用人達の出身地でもあったトリエステは、マリア・テレジア（1717-1780）の時代から、交通の要衝として、整備されていく。19世紀後半から、ハプスブルク帝国とオリエント諸国の商人の接点であった港町トリエステの文化については、須賀敦子による詩人ウンベルト・サバ、岡田温司による世紀転換期のトリエステのブルジョワの精神分析受容<sup>6</sup>（現代のイタリアは精神分析を捨てつつあり実はトリエステはその先進地域でもある）、河島英昭によるトリエステに居住したユダヤ人や強制収容所の実態などが紹介されているものの、マグリスと歴史家アンジェラ・アラの共著『トリエステ 国境の町のアイデンティティ』はまだ未邦訳である。今回の調査では、もともとはリグリア地方の商人の一族である、トリエステの大ブルジョワであったサルトリオ家の美術品と書籍のコレクションを、観察した。

中欧 *Mitteleuropa* という概念を提唱するマグリスのハプスブルク研究は、反ファシズムの出版社であるエイナウディ社のあるトリノの大学にいた頃にトリエステへの望郷の念から生じたものであり、ファシズムへの嫌悪感があるため、マグリスは、中欧の多言語性を強調するのである。

#### 4. 亡命者や移民にとってのアジールとしての国境の町トリエステ

・リルケ(1875-1926)…亡命者として、トリエステ近郊のドゥイノにある貴族の居城に滞在し、*Jeder Engel ist schrecklich*. というフレーズが印象的な『ドゥイノの悲歌』を書く。この城が地の果てにあるため、天界と人間界の境界としての天使に、リルケは目を向けたのではないだろうか。

・マリサ・マディエリ(1938-1996)…クロアチアの港町リエカに生まれ、移民として、トリエステに住むようになる。彼女の親類には、オーストラリアなどへの移民となったものもいる（このことは、マグリスの小説『盲目的に』の主題となる）。彼女が、マグリスと結婚するまでの生活を書いた私小説『緑色の水』は、クロアチア語、スペイン語、ドイツ語、ポーランド語、スロヴェニア語、フランス語、英語に翻訳されている。

・ミラ・ショーン(1919-2008)…第一次大戦まではハプスブルク帝国領であったクロアチアのトロギル出身の貴族であり、移民として渡ったトリエステで長く青春時代を過ごす。次第に、洋服のデザインを手掛けるようになり、1960年代から、イタリアのモード界の第一人者となる。2009年12月20日から2010年4月18日まで、トリエステ湾の展覧会場で、彼女のイブニングドレスの回顧展が開催されており、クリムト<sup>7</sup>を経由したビザンチン美術を生かした多くのドレスは、彼女の出身地であるバルカン半島で、モザイクの技法によるビザンチン美術が展開された歴史を思い出させるものとなっている。

<sup>6</sup> 岡田は、『トリエステ精神保健サービスガイド 精神病院のない社会へ向かって』（トリエステ精神保健局編、小山昭夫訳、現代企画室、2006年）を無視して、『フロイトのイタリア』（平凡社、2008年）を書いているが、これも、ハプスブルク神話の一形態であるかもしれない。

<sup>7</sup> 画家クリムトは、1903年にラヴェンナで、ビザンチン美術を熱心に勉強し、かなり影響を受けている。